

令和3年度 長崎市自然環境調査報告書：鳥類

長崎市自然環境調査委員 よしがい まさし 吉谷 将史

1 令和3年(2021 年 1 月 1 日～12 月 31 日) 長崎市自然環境調査報告：鳥類

令和3年までに記録された長崎市の野鳥は327種(亜種を含めると347種)、現行日本鳥類目録(第7版)での種のリストにおいて国内で記録のある野鳥は633種。長崎市内においては約半数の野鳥が確認されていることとなります。長崎市はご承知のように日本列島の西端に位置し、春は東南アジアなど南方で越冬した鳥達が、秋はシベリアや北日本で繁殖した鳥達が休息する中継地として極めて重要な位置にあります。(詳しくは別表長崎市鳥類目録参照)

また令和3年(2021年)の単一年度で確認された野鳥は245種(外来種4を含む)で1年間に確認された野鳥は全体の7割ほどでした。旅鳥の多い長崎市の傾向をあらわしている数値です。(詳しくは別表、長崎市鳥類チェックリスト参照)

来年には日本鳥類目録(第8版)の改定予定でもあり、長崎市にて観察できる主な野鳥について科ごとに最近10年間の傾向を鑑みながら記しておきます。

キジ科

国内では5種が生息しますが長崎市で確認できるのはウズラ、キジ、ヤマドリの3種。

ウズラは卵が食用として広く流通していますが、野生の個体は希少で見かけることは殆どありません。環境省のレッドデータでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、長崎市での記録は2009年に1例があるのみです。

キジは日本の国鳥。

民話「桃太郎」にも登場し、狩猟対象としても古くから私たちの身近にいる野鳥です。農耕地周辺など開けた環境を好み、ゴルフ場などでも観察されます。

ヤマドリは日本の固有種で国内には生息域ごとに5つの亜種に分類されています。長崎市で見られるものは主に北九州の林野部に棲息するアカヤマドリ。市内全域の山間部で見られますが警戒心が強く人前に現れるのは稀です。繁殖期のオスは縄張りを守るため、巣周辺に近づいた外敵に対し果敢に威嚇します。春先のハイキングなどでヤマドリに出会ったら、その場を離れるのが賢明です。



キジ♂



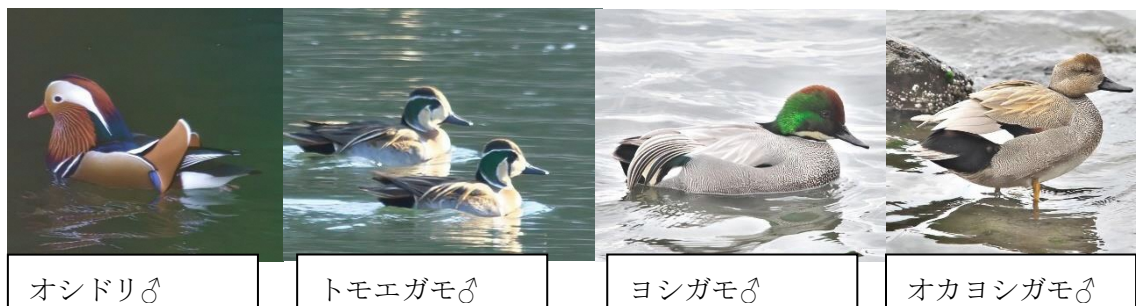
アカヤマドリ♂

カモ科

国内で観察記録があるのは 56 種。長崎市で確認があるのはヒシクイ、ツクシガモ、オシドリ、オカヨシガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、シマアジ、トモエガモ、コガモ、アカハシハジロ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、カワアイサ、ウミアイサの 20 種。ほとんどが冬場にやってくるのですが、皇居周辺などで毎年話題になるカルガモについては一部留鳥として棲息しています。

カモの仲間は水草や藻を主に食べるものが多いのですが、長崎県の県鳥でもあるオシドリは、ドングリなどの木の実を好んで食べることで知られています。歌舞伎役者のような顔だちが特徴的なトモエガモ、2000 年代初頭には世界的な減少が懸念され、国内の主な越冬地でも姿を見かけるのが少なくなりました。一時は長崎市内で殆ど見られなかったのですが、ここ 4～5 年は回復傾向にあり、各地の水源地などで確認されています。

ナポレオンハットで有名なヨシガモ、かつては川原大池に毎年少数が飛来していたのですが 2010 年ころから見かける機会が少なくなり、現在は冬場に定住していることはなく移動中の個体が見られる程度ようです。ヨシガモと似た環境を好むオカヨシガモについても同様で。2021 年度のガンカモ調査においては、長崎市での棲息確認ができていません。カモ類を観察することは、その多彩な羽模様の色彩から多くの野鳥ファンの冬場の楽しみでもあります。



カイツブリ科

国内で観察記録があるのは 5 種。長崎市で確認があるのはカイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリの 3 種。カイツブリは市内の湖沼において繁殖している留鳥。5 月ころには雛を背中に抱いたつつまじやかな光景を目にすることが出来ます。また春の移動時期にあたる 3～4 月には、市近郊の沿岸域でカンムリカイツブリやハジロカイツブリに出会えます。



ハト科

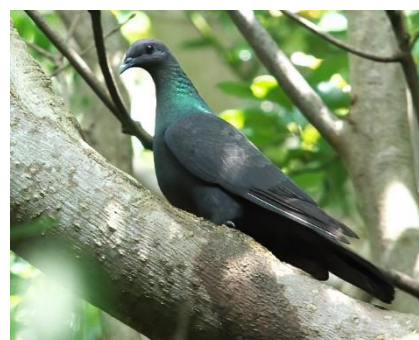
国内で観察記録のあるのは 11 種。長崎市で確認があるのはカラスバト、キジバト、ベニバト、アオバトの 4 種。平和の象徴として長崎市民に広く認識され各地で見かけるハト（ドバト）については海外由来の外来種でありますのでココでは数に含まれません。市の鳥としてハトが市民投票により選ばれましたが、ドバトのみでなく長崎市に棲息するハト科の貴重な野鳥について紹介しておきます。

カラスバトは全身黒色光沢の大型のハトでかつては東京湾内の島嶼にも生息していましたが、全国的に減少傾向が見られ、今日では西日本の島嶼域にて少数が棲息する貴重な鳥。1971 年には国の天然記念物(文化庁)、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されています。長崎市内においては沿岸域にて稀に姿を見かけるほか、少数が留鳥として繁殖します。

キジバトは留鳥としてひろく分布。アオバトは留鳥性が高いのですが冬場に見かけることが多く、ベニバトは渡り期に少数が通過します。



ドバト（カワラバト）



カラスバト

コウノトリ科

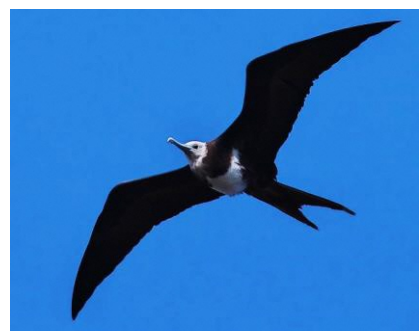
国内で観察記録のあるのは 2 種。コウノトリについては 1971 年に野生絶滅、その後の保護活動により人工繁殖が勧められ、ときはなれた個体が全国各地に飛散し、長崎市でも移動中の個体がときおり観察されます。2021 年においては 10 月に個体識別番号 JO388(千葉県野田市放鳥)が飛来し、12 月にも目撃されています。コウノトリについては足環を読み取ることが出来れば、その出生について知ることができます。



コウノトリ♂（愛称ミズキ）

ゲンカンドリ科

国内で観察記録のあるのは 2 種、そもそも南洋の鳥であり秋の台風などの気象条件により日本近海に出現することがあります。長崎市内でも以前から稀な記録がありますが、2019 年秋から 2020 年春先にかけてコゲンカンドリ 2 羽の幼鳥が長崎市近海にて一冬を過ごしました。



コゲンカンドリ

カツオドリ科

国内で観察記録があるのは3種。近年まで長崎市ではカツオドリのための記録でしたが、長崎大学環境科学部による海洋調査(主に鯨類)の協力もありアカアシカツオドリ、アオツラカツオドリについても長崎市近海で確認されています。カツオドリについては主に南洋の海鳥ですが、長崎市近海においては集団で越冬します。



カツオドリ

ウ科

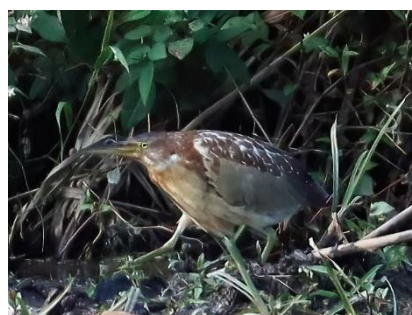
国内で観察記録があるのは4種。長崎市ではカワウ(留鳥)、ウミウ、ヒメウが冬場に観察できます。魚を丸のみする習性から、鮎漁としての鵜飼が古来から伝わっていますが、これに用いられるウはウミウ。カワウは近年、全国各地で増加傾向にあり、地域住民への糞被害、漁業被害などが取り沙汰され駆除対象になっている地域もあります。画像ではわかりにくいですがエメラルドグリーンの瞳がとても美しい鳥です。



カワウ

サギ科

国内で観察記録があるのは19種。長崎市で確認があるのはヨシゴイ、オオヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アカガシラサギ、アマサギ、アオサギ、ダイサギ(チュウダイサギ)、チュウサギ、コサギ、クロサギ、カラシラサギの13種。2021年の秋の渡りにおいて長崎市では3例目となるオオヨシゴイが確認されました。本州中部以北に夏鳥として飛来しますが数は極めて少なく、絶滅危惧IA類に指定されています。市内で確認できるのは渡りの時期のみ。



オオヨシゴイ

名前のゴイについては官位の五位に由来します。一般的に白鷺と呼ばれるサギですが、ダイサギ、チュウサギ、コサギと複数の種が存在するほか、個性豊かな種を河川や湖沼などで見ることができます。特にアオサギは個体数も多く、最も観察しやすいサギです。



ゴイサギ



チュウサギ



アカガシラサギ



アオサギ

ツル科

国内で観察記録があるのは 7 種。

ツルの渡来地として有名な鹿児島県出水市と距離的に近く春の北帰行では朝飛び立ったツル達がお昼ごろ長崎市内を通過します。越冬地へと向かう秋の南下では目的地を間近に、一時の羽休めの場所として市内に降りたつツルが少なからず居ます。日暮れ前に舞い降りて翌朝は飛び立つといったケースが殆どで、一般に目にする機会は少ないようです。マナヅルとナベヅルについては全世界に分布するなかでそのほとんどが出水市をはじめ日本国内で越冬するほか、となりの諫早平野においても毎年 200 羽前後が飛来します。



マナヅルとナベヅル（幼鳥）



早朝、出水平野を目指すナベヅルの一群（11 月）



ナベヅル

クイナ科

国内で観察記録があるのは 14 種、長崎市での確認は、クイナ、シロハラクイナ、ヒクイナ、ツルクイナ、バン、オオバンの 6 種。

バンは長崎市では留鳥として周年観察されますが、近年その姿を目にする機会は少なく、他所への移動が考えられる春の渡り期に見られるケースが多い。オオバンは冬鳥として湖沼でよく見られます。オオバンについてはかつてバンが見られた池などで増えているように感じます。

ヒクイナは全国的には夏鳥とされていますが、長崎市内での観察地では周年に渡り見ることができ、留鳥として扱っています。ヒクイナについても全国的に減少している鳥で準絶滅危惧種に指定されています。



バン



オオバン



ヒクイナ

カッコウ科

国内で観察記録があるのは 11 種、長崎市での確認はバンケン、カンムリカッコウ、オウチュウカッコウ、オオジュウイチ、ジュウイチ、ホトトギス、セグロカッコウ、ツツドリ、カッコウの 9 種に加え、鳥類目録第 7 版では非掲載のヒメカッコウが確認されています。

カッコウの仲間では代表的なのがホトトギス。「鳴かぬなら〜」信長、秀吉、家康の性格を端的にあらわした言葉の題材で知られています。その鳴き声は「テッペンカケタカ」や「トッキョキョカキョク」と聞きなしされています。またホトトギスを漢字で書くと「杜鵑」、音読みすると「トケン」となることからカッコウ科の仲間を総じてトケン類と呼びます。

トケン類では自ら子供を育てず、オオルリ、ウグイス、ムシクイ類などの巣に紛れて卵を産みつける托卵で知られています。長崎市で繁殖するのはホトトギスのみで、あとは旅鳥です。

「静かな湖畔の森の陰から、もう起きちゃいかがとカッコウが鳴く」の童謡でも有名なカッコウですが、長崎市近郊では雲仙山系（雲仙市）や多良山系（諫早市）で夏場に声を聞くことができます。



ホトトギス

ツツドリ

カッコウ

ヨタカ科

国内で観察記録があるのはヨタカ 1 種のみ。

日本各地に夏鳥として飛来しますが、長崎市内での確実な繁殖記録がなく、観察時期も春と秋に限られることから、長崎市においては旅鳥としています。夜行性で昼間は梢にジッとしており大変見つけ難い野鳥です。夕暮れ時、独特な「キョッ キョッ キョッ」の鳴き声でその存在に気がきます。



ヨタカ

アマツバメ科

国内で観察記録があるのは 4 種、長崎市ではハリオアマツバメ、アマツバメ、ヒメアマツバメの 3 種が確認されています。春と秋の渡り期に岬など海上付近の見晴らしのよい場所で確認できます。アマツバメについては、沿岸部の岩礁地帯にて一部繁殖が確認されており旅鳥から夏鳥へと変更しました。



アマツバメ

チドリ科

国内で観察記録があるのは 15 種、長崎市内ではタゲリ、ケリ、ムナグロ、ダイゼン、イカルチドリ、コチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、オオチドリの 9 種が確認されています。

千鳥饅頭の刻印のモデルとして、また酔っ払いの千鳥足はこのチドリ科の野鳥が地面を右に左によりめき歩く姿からきています。長崎市内での確認は多くが旅の途上の羽休めですが、夏鳥としてコチドリが繁殖するほか、2021 年にはイカルチドリが初めて確認されました。イカルチドリは主に大きな河川の中流域の中州の玉砂利を好む点で長崎市には好適地がなく、確認できなかった種。2021 年にはコチドリが好むような河口域の浜辺で番(つがい)を確認。孵化には成功しましたが、野良猫かカラスにやられたようで、翌日には雛の姿はなく親鳥だけがとり残されていました。イカルチドリ繁殖成功の喜びはわずか 1 日でしたが、自然の営みのなかで今後も見守っていければと思います。

イカルチドリ 雛と親鳥。



ケリ (長崎市では旅鳥)



コチドリ (求愛行動)



抱卵中のイカルチドリ

ミヤコドリ科

国内で観察記録があるのはミヤコドリ 1 種のみ。

長崎市の記録については 2018 年秋に 1 例があります。

この個体は背中中の黒色味や足の赤色が淡く 1 年目の幼鳥で渡り途上で羽休めに舞い降りたものでしょう。ミヤコドリの名は古く万葉集にも登場するのですが、この鳥を指すのか、同じく夏場に黒い頭を持つユリカモメを指すのか、鳥類研究者と国文学者の間で論争がくりひろげられています。



ミヤコドリ (幼鳥)

セイタカシギ科

国内で観察記録があるのは 2 種、長崎市での確認はセイタカシギ 1 種。気品たよう美しい鳥です。

かつての日本では稀に見られる迷鳥でしたが、今では東京湾周辺でも繁殖しています。長崎市においては旅鳥ですが 2000 年以降、春と秋に毎年のように記録されています。



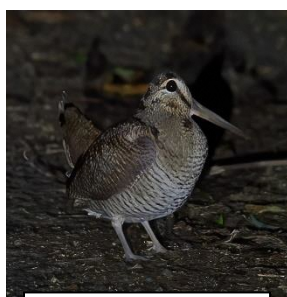
セイタカシギ

シギ科

国内で観察記録があるのは58種、長崎市での確認はヤマシギ、アオシギ、チュウジシギ、タシギ、オグロシギ、オオソリハシシギ、コシャクシギ、チュウシャクシギ、ホウロクシギ、アカアシシギ、コアオアシシギ、クサシギ、タカブシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、キョウジョシギ、トウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、ウズラシギ、ハマシギ、エリマキシギ、キリアイ、アカエリヒレアシシギ、ハイイロヒレアシシギの 27 種。

主に干潟に棲息するシギの仲間、長崎市内において観察機会があるのは渡り期がほとんどですが休息地に乏しく、数も種も年によって変化が激しい。かつての諫早湾は日本最大級のシギの楽園でしたが、干拓事業によりかつての干潟は失われ、シギの数は激減してしまいました。幸い鳥達は大空を縦横無尽に往来できるため、隣県の佐賀県の東よが干潟周辺が日本最大級のシギ達の飛来地になっています。

市内では見る機会の少ないシギの仲間、冬鳥としてやってくるヤマシギは夜行性で目にする機会が少ないものの農耕地周辺の緑林に一定数がいるものと推測できます。クサシギやキアシシギといった毎年のように確認できる渡り鳥もいます。周年をとおして目にする事が出来るのはイソシギの 1 種のみです。



ヤマシギ



クサシギ



キアシシギ



イソシギ

レンカク科

国内で観察記録があるのはレンカク 1 種のみ。長崎市では 2021 年初夏、水張りを終えた田んぼに 1 羽が飛来。2010 年以来 2 例目の記録となりました。

国内では稀な旅鳥として各地に記録がありますが、見られる機会はほとんどない貴重な記録です。



レンカク

ツバメチドリ科

国内で観察記録があるのはツバメチドリ 1 種のみ。

もともと南方系の鳥で、繁殖地の北限は台湾とされていますが、近年北上を続け関東以南で局地的に繁殖例が報告されています。長崎市において繁殖例は確認されていませんが、春の渡りでは毎年確認でき、夏場に幼鳥の目撃例もあります。地球温暖化が、もしかすると野鳥達の分布にも影響を及ぼしているのかもしれません。



ツバメチドリ

カモメ科

国内で観察記録があるのは45種、長崎市での確認はミツユビカモメ、ユリカモメ、ズグロカモメ、ウミネコ、カモメ、シロカモメ、セグロカモメ、キアシセグロカモメ、オオセグロカモメ、ホイグリンカモメ、ニシセグロカモメ、オニアジサシ、セグロアジサシ、ベニアジサシ、アジサシ、クロハラアジサシ、ハジロクロハラアジサシの 17 種。

カモメの仲間については、ほとんどが冬鳥ですがウミネコは長崎周辺海域でも繁殖しており留鳥。長崎市南部の川原大池では冬場にウミネコとセグロカモメの混群が見られ、淡水域で休息するものが見られます。

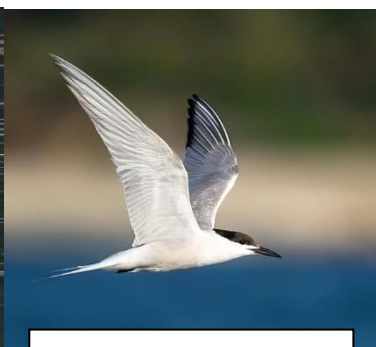
アジサシ類については、台風通過後に見られるケースが多く、春と秋の渡り期にも散発的に各地の漁港付近を飛び交う姿が見られます。



セグロカモメ



ウミネコ



アジサシ

トウゾクカモメ科

国内で観察記録があるのは4種、長崎市での確認は2020 年 6 月に観察されたオオトウゾクカモメの 1 種のみ。南極大陸で繁殖し、アラスカまで北上、地球上を縦断する大型の海鳥。日本列島周辺海域でもしばしば見られますが沿岸部での観察事例と画像におさめられたのは極めて希少。長崎県内においては五島沖など 4 例の記録がある。



オオトウゾクカモメ

ウミスズメ科

国内で観察記録があるのは16種、長崎市での確認はウミスズメ、カンムリウミスズメ、ウトウの3種。

カンムリウミスズメは日本近海及び朝鮮半島南部にのみ生息する世界的希少種。長崎湾内でも冬場に少数の群れが観察できます。長崎周辺での繁殖は確認されていません。絶滅危惧Ⅱ類(環境省)に該当し、1975年には国の天然記念物(文化庁)に指定され、伊豆諸島を中心に保護活動が行われている希少種です。



カンムリウミスズメ

ミサゴ科

従来ミサゴ(魚鷹)はタカ科のなかの種としてあつかわれてきましたが鳥類目録第7版より科として独立。タカ目ミサゴ科となり、ミサゴ科の野鳥はミサゴの1種のみです。周囲を海に囲まれた長崎市では最も一般的なタカの仲間で中心部を流れる浦上川でも盛んに狩りをする姿を見ることが出来ます。環境省カテゴリーでは準絶滅危惧種に該当し、環境変化によっては生存が危ぶまれる貴重な鳥です。



ミサゴ

タカ科

国内で観察記録があるのは25種、長崎市での確認はハチクマ、トビ、オオワシ、ハイイロチュウヒ、アカハラダカ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリの10種。

長崎市周辺で繁殖が確認されているのは夏鳥のサシバ(絶滅危惧Ⅱ類)と留鳥のトビの2種。冬鳥としてノスリ、ハイタカが見られます。勇壮で大空を舞う姿が人々を魅了するタカの仲間ですが、一番の観察機会は秋の渡り。

小型のタカ(ハトぐらい)であるアカハラダカは時に1000羽以上の群れを形成し9月に朝鮮半島を南下。対馬市や佐世保市が観察好適地として有名ですが、長崎市内でも条件に恵まれれば近くで舞うアカハラダカを観察できます。

日本各地の山林で繁殖するハチクマ。その名の通りハチを主食にする猛禽類でスズメバチの針をも通さない鎧のような羽毛に覆われています。秋には日本列島を西に移動しながら五島列島を横切り、東シナ海を経て中国大陆から南下、東南アジアを目指します。その途上、長崎市内において



上昇気流にのるアカハラダカ



ハチクマ

も数は少ないですが運がよければ間近に見ることが出来ます。

オオタカはカモなどの冬鳥目当てに南下してくる個体が多いのですが、春秋の渡り期に見かける程度で冬場に定着する個体はすくないようです。全国的に留鳥として分布するツミですが、長崎市内での繁殖は確認されておらず、渡り期に見られるほか一部冬を過ごすものがある程度です。



ハイタカ



サシバ



ノスリ

フクロウ科

国内で観察記録があるのは11種、長崎市での確認はオオコノハズク、コノハズク、フクロウ、アオバズク、トラフズク、コミズクの6種。オオコノハズクについては近年の記録はありません。留鳥のフクロウについては夜間のヒヤリングから一定数はいるようです。夏鳥であるアオバズクについては繁殖好適地の環境変化もあり数を減らしているようです。コノハズク、トラフズク、コミズクについては渡り期に運がよければ出会える程度です。



キュウシュウフクロウ

ヤツガシラ科

この科に属する種は世界中でヤツガシラのみ。いくつかの亜種が存在するようですが詳細は不明。

野鳥ファンのみならず写真愛好家の間でも、“一生に一度は見てみたい”と言われる人気の高い野鳥。

長崎市では春の渡り期に毎年一定数が通過しますが、単独で渡りをするうえ滞在期間は2～3日、長くて1週間程度。見つけると、つい嬉しさのあまり観察にいそしみたくなるものですが、野鳥保護の観点からも、複数で鳥を囲んでの撮影や、追いかけてまわす行為は慎みたいところ。鳥だけでなく、周囲の人の迷惑にならないよう心掛けて観察を楽しみたいものです。



ヤツガシラ

カワセミ科

国内で観察記録があるのは8種、長崎市での確認はアカショウビン、ヤマショウビン、カワセミ、ヤマセミの4種。

カワセミは清流の宝石と称される鳥で人気も高い。環境への適応能力は意外と高いようで、市内中心部の浦上川、中島川でも見ることができます。また浅瀬の海で小魚を捕食するシーンに出くわすこともあります。見ていて飽きない、魅力的な野鳥。カワセミのいない河川は生態系的に問題があると言っている、環境の指標にもなる鳥のように感じます。



カワセミ

ブッポウソウ科

国内で観察記録があるのはブッポウソウ 1 種のみ。

カワセミ同様、緑色光沢の美しい鳥で夏鳥として北海道、沖縄を除く日本各地に飛来します。長崎市での繁殖事例はなく旅鳥。森林開発により数をへらしており絶滅危惧IB類に該当し、岡山県吉備中央町では、地域ぐるみの保護活動がなされています。希少な鳥ですが注意深く電線などを見ていると渡り期には意外と出会える確率は高く、私の住む稲佐山の麓の自宅からも毎年のように観察ができています。



ブッポウソウ

キツツキ科

国内で観察記録があるのは 12 種、長崎市での確認はアリスイ、コゲラ、アオゲラの3種のほかアカゲラを目撃例がある。国内で見られる種のうちキタタキについては対馬でのみ確認されています。ですが最後の記録が1920年と100年を遡ることから絶滅したものと考えられています。

アリスイはその名の通り、主にアリを捕食する。長崎市においては冬鳥で繁殖例はない。

コゲラはスズメと同じくらいの大きさ、日本で見られるキツツキでは最小。街中の街路樹などでも見ることができます。

アオゲラは市内の緑林に広く生息しており自宅からも稲佐山方面から鳴き声が頻繁に聞こえるのですが姿を目にすることはあまりありません。



アリスイ



キュウシュウコゲラ



カゴシマアオゲラ

ハヤブサ科

国内で観察記録があるのは8種、長崎市での確認はヒメチョウゲンボウ、チョウゲンボウ、アカアシチョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ハヤブサの5種。かつてはタカ目のなかのハヤブサ科として分類されていましたが、鳥類目録第7版からは新たにハヤブサ目ハヤブサ科として独立。DNA分析から、タカの系統ではなくオウムやインコに近いことが明らかにされています。

ハヤブサは絶滅危惧Ⅱ類に該当する希少種ですが長崎市内において複数の番形成が確認されており留鳥として観察可能なほか、冬場には越冬のため飛来するものも存在します。

チョウゲンボウは冬鳥で長崎市内での繁殖事例はありません。越冬のため飛来するチョウゲンボウは国内で繁殖する個体に比べ体色が淡い個体が混じっており朝鮮など大陸から渡ってくるものもいるのではないかと考えていますが、詳細は不明です。



チョウゲンボウ



ハヤブサ



ハヤブサ飛翔

ヤイロチョウ科

国内で観察記録があるのは2種、長崎市での確認はヤイロチョウの1種。西日本に夏鳥として飛来します。年々減少傾向にあり絶滅危惧ⅠB類に該当する希少種。名前の通り色彩豊かな鳥で野鳥ファンの間でも最も人気のある種。市内でも少数が繁殖していると推測しますが、2021年においては3か所で鳴き声の確認ができたにとどまり、繁殖を示唆する兆候や個体確認はできませんでした。



ヤイロチョウ

サンショウクイ科

国内で観察記録があるのは2種、長崎市での確認は種レベルではサンショウクイの1種。2000年代に入り生息域を拡大している亜種リュウキュウサンショウクイが留鳥として分布。次期鳥類目録第8版ではリュウキュウサンショウクイは独立した種とする案が検討されています。亜種サンショウクイについては旅鳥で秋の渡りでは50羽前後の群れがよく観察されます。

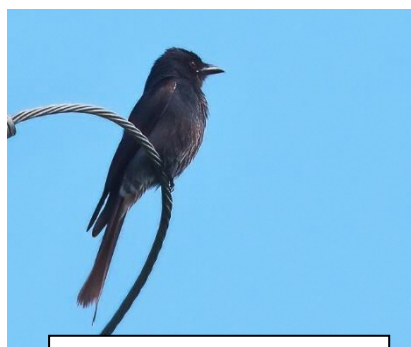


サンショウクイの渡り

オウチュウ科

国内で観察記録があるのは3種、長崎市での確認は、オウチュウ、ハイロオウチュウの2種。

ハイロオウチュウについては、観察頻度は低いですが春と秋の渡り期に見られます。オウチュウについては毎年春の渡り期に記録があります。両種とも本来の生息地はインドから東南アジア、中国南部と似通っており、渡り期のオーバーシュートによる飛来なのでしょう。



オウチュウ

カササギヒタキ科

国内で観察記録があるのは2種、長崎市での確認は、サンコウチョウの1種のみ。オスの夏羽では非常に長い飾り羽があり、眼と嘴はブルー。俳句にもよく詠われる野鳥で「三光鳥 帯解き放つ 宿院に」など長い尾を帯になぞらえた句が存在しますが、尾が長いのは雄のみです。長崎市でも夏鳥として飛来。溪流沿いの山間部で鳴き声を聴く機会がありますが姿を目にするのは稀。



サンコウチョウ

モズ科

国内で観察記録があるのは8種、長崎市での確認はチゴモズ、モズ、アカモズ。タカサゴモズの4種。他にシマアカモズ(アカモズ亜種)などが確認されています。以前は夏鳥として関東以北にてアカモズは里山など、チゴモズは住宅地周辺の樹林帯でも見られた普通種だったのですが、環境開発に伴い激減し、絶滅危惧 IA 類(チゴモズ)、絶滅危惧 IB 類(アカモズ)に該当します。市内では渡り期にごく少数が観察される程度。モズ♀は一見アカモズに似ますが、身体の色みはくすんでいる点、額の白色部が目立たない点など見分けは比較的容易です。



チゴモズ



アカモズ



モズ♀

カラス科

国内で観察記録があるのは11種、長崎市での確認はカケス、カササギ、ミヤマガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラスの5種。カケスは隣の佐賀県の県鳥で、国の天然記念物に指定されています。国内では佐賀平野周辺のみ分布しており、その由来については諸説ありますが、秀吉の朝鮮出兵の際、鍋島藩が持ち帰ったという言い伝えがあります。佐賀県と接する諫早市や大村市には分布域を拡大していますが、長崎市においては移動中の個体が稀に見られる程度で定着はしてないようです。一般にハトと同じようにカラスと言うと種はひとつのように思われがちですが、形態の似たもので、市内でも3種が確認できています。

体が大きく、おでこが出っ張りゴリラのような風貌のハシブトガラス、街中の公園などでよく見かけるのは少し小振りなハシボソガラス、の2種が留鳥として見られます。

ミヤマガラスは冬鳥として飛来、諫早平野では多数見られますが、平野部の耕作地の少ない長崎市では移動中の個体に出会える程度ようです。

カケスは色彩豊かなカラスの仲間で、山間部にて見ることが出来ます。



ハシブトガラス



ハシボソガラス



カササギ

キクイタダキ科

国内で観察記録があるのはキクイタダキ1種のみ。体長は10cmほどで、日本産野鳥の中では最小クラス。頭頂部に鮮やかな黄色い飾り羽があります。それを菊に見立てて、キクイタダキの和名となっています。全国的には留鳥に区分されることが多いのですが、長崎市内では繁殖例はなく、北方から冬に移動してくるものが見られ、冬鳥としています。



キクイタダキ

ツリスガラ科

国内で観察記録があるのはツリスガラ1種のみ。

葦原などに冬鳥として飛来します。諫早平野では一定数が冬場に見られますが、長崎市では数は少なく、冬鳥としてもあまり定着していないようです。越冬地への移動中の個体が11月初旬に見られるほか、3～4月には繁殖地へと帰る途上の群れを観察することがあります。



ツリスガラ

シジュウカラ科

国内で観察記録があるのは7種、長崎市での確認はヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、キバラガラの4種。

ヤマガラは、全国的に留鳥として分布し、人懐っこく愛くるしい姿で私たちの生活にも深くかかわってきました。鳥獣保護法により国内の野鳥の捕獲・飼育が禁じられているため途絶えています。かつては縁日でおみくじを引くなど芸事にも通じていました。

シジュウカラも全国に分布する日本を代表する野鳥と言っている。近年の研究から鳴き声によるコミュニケーションを活発に行なっていることが知られています。しかも文法的に単語を組み合わせ、200種にも及ぶ複雑な会話をしているというから驚きです。

キバラガラは本来、中国大陸に分布する小型のカラ類。近年、冬場に日本各地にて報告事例があり、鳥類目録第7版から日本で見られる野鳥に追加されました。

ヒガラは確かな棲息確認はできていないのですが、渡り期に鳴き声の確認が数例あります。



ヤマガラ



シジュウカラ



キバラガラ

ヒバリ科

国内で観察記録があるのは5種、長崎市での確認は、ヒメコウテンシ、コヒバリ、ヒバリの3種。

ヒメコウテンシについては春の渡り期に少数が通過します。名前の由来については、コウテンシを漢字表記すると告天子。天空に舞い上がり囀るヒバリの形態をあらわす言葉。ヒバリに比べどことなく穏やかな印象を受けることからヒメ(姫)を頭文字に付け加えたのではないのでしょうか。かつ

てはカラフトコヒバリと呼ばれていたそうですが、現代のヒメコウテンシがふさわしく思います。

コヒバリは2021年11月に長崎市内では初めて確認されました。全国で局地的に記録がありますが、数は少ない。ヒバリに比べ全体的に色は淡く小型ですが、普段からヒバリをよく見ていないと違いにはナカナカ気づけません。目立たない野鳥のため見逃されているケースもあるのではないかと思います。

ヒバリは長崎市では棲息好適地が少なく、留鳥として見られる場所は限られます。春の渡り期には移動する個体群が確認でき、おそらく千島列島以北にむかうのではないかと考えています。



ヒメコウテンシ



コヒバリ



ヒバリ

ツバメ科

国内で観察記録があるのは8種、長崎市での確認はショウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメの4種。

ショウドウツバメは全世界に広く分布しますが、国内で繁殖するのは北海道のみ。他は移動中の個体に出会える旅鳥。秋のタカの渡り観察中などに目にすることが多い。

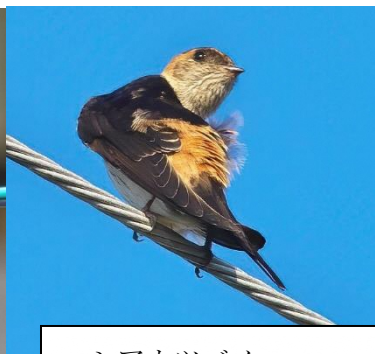
ツバメは皆さまにも馴染みの野鳥。日本家屋の減少に伴い、都市部ではビルの軒下などを巣に利用しています。ツバメが宿る家には「福来る」と古来から言われ、暖かく見守りたいものです。

コシアカツバメはツバメに比べると数は少ないが、長崎市南部などで一部繁殖しています。ツバメがお椀型の巣を形成するのに対して、入口が狭く中が広い徳利型の巣を作ります。ツバメの仲間は、泥を団子状に固めたものを積み重ねて巣作りをします。

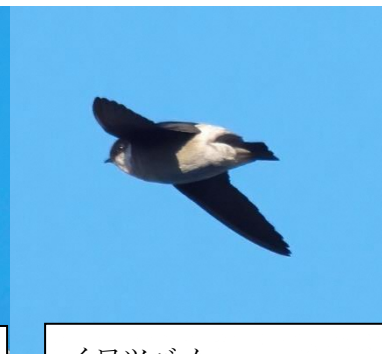
イワツバメは多くが夏鳥ですが、一部越冬している個体もあり、ほぼ周年観察することができます。橋の欄干の下などを好み、市内中心部の浦上川でも見る事が出来ます。



ツバメ



コシアカツバメ



イワツバメ

ヒヨドリ科

国内で観察記録があるのは2種、長崎市での確認も同様にシロガシラ、ヒヨドリの2種。

シロガシラは主に南西諸島、琉球諸島に分布しますが、本土域でも局所的に渡り期に見られます。

ヒヨドリは留鳥として全国に分布しますが、大規模な移動をすることでも知られています。農作物(特に果物)への被害が深刻な野鳥でもあります。



ヒヨドリ

ウグイス科

国内で観察記録があるのは2種、長崎市での確認も同様にウグイス、ヤブサメの2種。他に亜種チョウセンウグイスも稀に見られます。

ウグイスは「ホーホケキョ」の囀りで春の訪れの代名詞でもあり古くから日本人に親しまれてきた野鳥。英名が、Japanese Bush Warbler であることから海外でも日本の鳥として認知されていることがうかがい知れます。

ヤブサメはウグイスに比べ茶色味が強く、尾が短いことで見分けがつきます。国内では主に夏鳥ですが、長崎市内では冬場に確認出来ることもあり、一部越冬しています。虫が鳴いてるかのように「シシシシシ、、、」と連続して囀ります。ウグイスが梢の上などで盛んに鳴くのに対して、地面近くの藪の中で鳴くため、姿を見る機会は以外と少ない。



ウグイス



ヤブサメ

エナガ科

国内で観察記録があるのはエナガ1種のみ。4亜種が存在し長崎市で見られるのはキュウシュウエナガ。顔全体が白く、その愛くるしい姿で最近話題の亜種ダルマエナガは北海道に分布します。鳥の羽毛を巧みに貼り合わせて巣作りすることでも知られています。

初夏、新緑の季節になると巣立ちした雛たちが集団で梢にとまる、通称エナガ団子と呼ばれる光景を目にすることができます。



キュウシュウエナガ (幼鳥)

ムシクイ科

国内で観察記録があるのは15種、長崎市での確認は、チフチャフ、ムジセッカ、カラフトムジセッカ、カラフトムシクイ、キマユムシクイ、コムシクイ、オオムシクイ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、アムールムシクイ、センダイムシクイ、イイジマムシクイの12種。渡り期の一時滞在の記録がほとんどですが、国内で観察できるムシクイ類の大半を市内で見ることができます。

ムシクイ類については外見が似通っており、一見どの野鳥も同じに見えるうえ、野外での外見上の識別は大変困難なケースも多い。鳴き声の確認で種の存在に気付くのがほとんどです。

一般に知られている聞きなしとして、「焼酎一杯グイー」はセンダイムシクイ、「ゼニトリ ゼニトリ」はメボソムシクイ、「ヒツキ ヒツキ」はエゾムシクイなど。エゾムシクイについては「シーチキン」と聞こえるように憶えておくとうっかりしやすいかもしれません。

長崎市内ではセンダイムシクイが一部山間部で繁殖している可能性がありますが、確実な繁殖記録はありません。体長は10～13cmと小型の鳥ですが、鳴き声の多彩さに加え、遠距離の渡りをするものもいることでも興味深い野鳥です。

八重山諸島で一部越冬することが知られているコムシクイ。北アメリカに分布する亜種アメリカコムシクイと言われています。コムシクイについては近年の観察で九州各地を移動していることがわかってきましたが何処からきて何処に行くのかは明らかにされていません。

キマユムシクイはユーラシア大陸北部に広く分布し、冬は台湾からマレー半島にて越冬します。市内でも渡り期には群れで観察されることが多く、「チュイー」という特徴的な鳴き声を耳にします。また一部越冬する個体もあり、2021年12月にも鳴き声を確認しました。



センダイムシクイ



コムシクイ



キマユムシクイ

メジロ科

国内で観察記録があるのは3種、長崎市内での確認はメジロとチョウセンメジロの2種。

以前から愛玩用として親しまれてきた野鳥ですが、鳥獣保護法の改正により2012年(平成24年)以降は、飼育並びに捕獲は原則禁止となっています。



メジロ

センニュウ科

国内で観察記録があるのは6種、長崎市内での確認は、マキノセンニュウ、シマセンニュウ、ウチヤマセンニュウ、エゾセンニュウの4種。名前の通り潜行性が非常に高い野鳥で目にする機会は極めて少ない。市内の島嶼部でウチヤマセンニュウが夏鳥として一部繁殖するほかは渡り期に鳴き声の確認にてその存在に気付く程度です。



シマセンニュウ

ヨシキリ科

国内で観察記録があるものは7種、長崎市内での確認は、オオヨシキリ、コヨシキリ、ハシブトオオヨシキリの3種。

オオヨシキリは夏鳥として葦原のある湿地帯に飛来。「ギョツ ギョツ、、、」と大変大きな声で鳴く。

コヨシキリは渡り期に少数が確認できるほか、国内での確認事例が極めて少ないハシブトオオヨシキリについて数例の記録がある。



オオヨシキリ

セッカ科

国内で観察記録があるのはセッカ1種のみ。

長崎市内では留鳥として農耕地付近や川辺の葦原などに棲息している。セッカの漢字表記は雪加。名前の由来についての定説はないが、鳥類研究者の安部直哉氏によると、巢材となるチガヤの白い穂を雪に見立てて、それを加えて飛ぶ姿から、雪加(セッカ)となったのではないかと説いています。



セッカ

レンジャク科

国内で観察記録があるものは2種、長崎市内での確認も同じくキレンジャクとヒレンジャクの2種。連雀(レンジャク)は群れる鳥を意味し、時には100羽単位の群れで行動する様子は圧巻です。尾羽の先端が赤いものがヒレンジャク。黄色いものがキレンジャク。古来中国ではヒレンジャクは「十二紅」キレンジャクは「十二黄」と呼ばれました。十二は尾羽の枚数を指します。



ヒレンジャク

ミソサザイ科

国内で観察記録があるのはミソサザイ1種のみ。

体長わずか10cmほどの小さな鳥ですが、声量は豊かで、夏の溪流沿いなどでその声を聴くことができます。夏のイメージが強い野鳥ですが、季語では里山に降りてくる冬の鳥です。また民話の世界では「鳥の王様」として日本でも、海外でも親しまれている野鳥です。



ミソサザイ

ムクドリ科

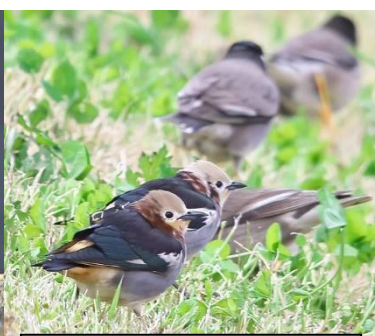
国内で観察記録があるものは7種、長崎市内での確認はギンムクドリ、ムクドリ、コムクドリ、カラムクドリ、バライロムクドリ、ホシムクドリの6種。ムクドリはかつての長崎市では冬場に見られることが多かったのですが、2000年代に入り市内での定着が目立つようになりました。今では周年普通に観察できる留鳥となっています。

コムクドリは渡り期にムクドリの群れに混じっていることがよくあります。

ホシムクドリについては欧米では生態系に影響を及ぼす鳥として扱われることがありますが、長崎市では渡り期に少数が見られる程度です。



ムクドリ



コムクドリ（奥はムクドリ）



ホシムクドリ

ヒタキ科

鳥類目録第7版では従来のツグミ科とヒタキ科が統合され一つに分類されたことで、国内で観察記録のあるものは51種、長崎市内での確認は、マミジロ、トラツグミ、カラアカハラ、クロツグミ、クロウタドリ、マミチャジナイ、シロハラ、アカハラ、ノドアカツグミ、ツグミ、コマドリ、アカヒゲ、オガワコマドリ、ノゴマ、コルリ、シマゴマ、ルリビタキ、クロジョウビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、ヤマザキヒタキ、イナバヒタキ、ハシグロヒタキ、イソヒヨドリ、ヒメイソヒヨ、エゾビタキ、サメビタキ、コサメビタキ、ミヤマヒタキ、マミジロキビタキ、キビタキ、ムギマキ、オジロビタキ、オオルリ、ロクショウヒタキの35種のほか、カワビタキの記録がある。

長崎市で観察されるヒタキ科について属ごとに再分類すると、

トラツグミ属

大型のツグミ類で長崎市ではトラツグミ(冬鳥)とマミジロ(旅鳥)が観察できます。

トラツグミは主に冬鳥ですが、夏場の山間部で鳴き声を聴くこともあり繁殖している可能性があります。

マミジロは渡り期に観察できる旅鳥。



マミジロ

ツグミ属

カラアカハラ、クロツグミ、クロウタドリ、マミチャジナイ、シロハラ、アカハラ、ノドアカツグミ、ツグミ、ハチジョウツグミ(第7版ではツグミ亜種)、が観察されています。

シロハラは冬鳥で市内の公園でも観察可能。

クロツグミは近年、長崎市内でも繁殖を確認しています。

カラアカハラは数少ない旅鳥とされていますが、春の渡りで頻繁にみられるようになったほか夏季の記録もあります。



ツグミ



カラアカハラ



クロツグミ



シロハラ

ノゴマ属

旧ツグミ科に属し、いわゆる小型ツグミ類と称されます。長崎市で見られるのはコマドリ、アカヒゲ、オガワコマドリ、ノゴマ、コルリ、シマゴマがそれに当たり、地面をホッピングしながら移動します。何れも春の渡り期に記録が多く、4月上旬には日本3鳴鳥に数えられる、コマドリの「ヒンカララ」という馬のいななきのような美しい囀りを山間部で確認できますが、姿を目にする機会は少ないです。

ノゴマ属での長崎市の繁殖例はありません。



ノゴマ

ルリビタキ属

国内で観察記録があるのはルリビタキ1種のみ。オスは名前の通り瑠璃色が美しい。成鳥になるのに4年かかると言われ、渡りを繰り返しながら4年の歳月を生き延びるのは大変なようで、綺麗な成鳥♂に出会える機会は少なく貴重といえます。長崎市内でも若い個体は冬場に山間部で見かける冬鳥。



ルリビタキ

ジョウビタキ属

国内で観察記録があるものは4種、長崎市内での確認はクロジョウビタキ、ジョウビタキの2種。クロジョウビタキについては過去に3例あるのみの迷鳥。ジョウビタキは雄が羽織をまとったような容姿から紋付鳥の呼称でも親しまれています。冬鳥として市内各地で観察できます。



ジョウビタキ

ノビタキ属

国内で観察記録があるものは4種、長崎市内での確認はノビタキ、ヤマザキヒタキの2種。ノビタキは春に夏羽、秋に冬羽の違いが楽しめますが、市内では繁殖しない旅鳥。

ヤマザキヒタキは2例の記録があるのみの迷鳥。



ノビタキ (♂夏羽)

サバクヒタキ属

国内で観察記録があるものは4種、長崎市内での確認はイナバヒタキとハシグロヒタキの2種。何れも中央アジアを主に棲息する鳥で冬はアフリカ中央部に渡る大陸系の野鳥。長崎市では迷鳥としてイナバヒタキは春、ハシグロヒタキは秋の記録があります。



イナバヒタキ

イソヒヨドリ属

国内で観察記録があるものは2種、長崎市内でもイソヒヨドリ、ヒメイソヒヨ両種確認があります。

イソヒヨドリは市内各所で見られ、市民にもなじみの深い野鳥。ヒメイソヒヨはこれまで何度か春の渡り期に確認されている程度です。



イソヒヨドリ

サメビタキ属

国内で観察記録があるものは5種、長崎市内での確認はエゾビタキ、サメビタキ、コサメビタキ、ミヤマヒタキの4種。エゾビタキ、サメビタキ、コサメビタキについては春と秋に通過個体を市内各地で目にしますが、秋のほうが観察しやすい。ミヤマヒタキは国内でも一部の地域でしか観察されていない迷鳥ですが、長崎市ではこれまでに4例の記録があります。



エゾビタキ

キビタキ属

国内で観察記録があるものは5種、長崎市内での確認はマミジロキビタキ、キビタキ、ムギマキ、オジロビタキの4種のほか、キビタキ亜種で南西諸島や沖縄本島に棲息するリュウキュウキビタキも確認されています。

キビタキについては近年繁殖地を広げており、長崎市内でも山間部に定着しつつあります。



キビタキ

オオルリ属

国内で観察記録があるのはオオルリ1種のみ。

コマドリ、ウグイスとともに日本3鳴鳥に数えられ、「ヒーリーチチン」という鳴き声は夏の峰々にさわやかな清涼感を与えてくれます。色合いも大変美しい。長崎市でも繁殖しており、日本を代表する夏鳥。

メスは地味な褐色で、シーボルトが持ち帰った19世紀の欧州ではメスを別種として紹介した経緯があります。

また似た種としてアイイロヒタキ属にあたるロクショウヒタキの記録が2例あります。



オオルリ

スズメ科

国内で観察記録があるものは3種、長崎市内での確認はニュウナイスズメ、スズメの2種。スズメは最も身近な野鳥のひとつで「舌切り雀」など民話にも数多く登場する。かつては食用としても重宝されていました。現在では国内のスズメの減少、狩猟者の減少などからスズメを焼鳥屋でみることはあまりないようです。スズメの減少率は30年前から比べると5割以上との試算もあります。

ニュウナイスズメは渡り期に少数が市内でも観察できます。



スズメ

セキレイ科

国内で観察記録があるものは15種、長崎市内での確認はイワミセキレイ、ツメナガセキレイ、キガシラセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、マミジロタヒバリ、ヨーロッパビンズイ、ビンズイ、ムネアカタヒバリ、タヒバリの11種。ハクセキレイ、ツメナガセキレイにおいては世界各地で亜種が存在し、長崎市では日本初記録としてハクセキレイ亜種ペルシャハクセキレイ、ツメナガセキレイ亜種ロシアツメナガセキレイの報告例があります。

ハクセキレイ、キセキレイ、セグロセキレイは留鳥として市内にも分布しますが、その他は旅鳥が多くビンズイは冬鳥として見られます。



イワミセキレイ



ツメナガセキレイ



キガシラセキレイ



ハクセキレイ (冬羽)



ホオジロハクセキレイ



セグロセキレイ

アトリ科

国内で観察記録があるものは18種、長崎市内での確認はアトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニヒワ、ハギマシコ、ベニマシコ、アカマシコ、イスカ、ウソ、シメ、コイカル、イカルの12種。

アトリは時に集団で数千羽単位の群れが冬場に見られますが、市内では少数が渡り期に観察されることが多く、冬場の記録は少ない。

ウソ(亜種アカウソ)については太宰府天満宮(福岡県)の守り神としても有名な野鳥。冬鳥ですが年により増減の激しい鳥。

シメはその風貌に特徴があり、滑稽な姿が人気の野鳥。こちらもウソと同じく年により変動の激しい鳥ですが、近年見かける機会が少なくなったように感じます。



アトリ (夏羽)



アカウソ



シメ

ホオジロ科

国内で観察記録があるものは 27 種、長崎市内での確認はシラガホオジロ、ホオジロ、イワバホオジロ、シロハラホオジロ、ホオアカ、コホオアカ、キマユホオジロ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、シマアオジ、シマノジコ、ズグロチャキンチョウ、ノジコ、アオジ、クロジ、シベリアジュリン、コジュリン、オオジュリン、キガシラシトド、サバンナシトドの20種。第7版ではアオジの亜種とされているシベリアアオジが第8版では独立種として扱われる予定です。

市内に留鳥としているのはホオジロのみ。カシラダカは世界的減少著しく国内の飛来数も減少の一途をたどっています。ミヤマホオジロも冬鳥ですが2021年夏季には1羽が確認されています。

国内では最も絶滅の危機に瀕しているシマアオジも渡り期に少数が通過します。



ホオジロ



カシラダカ



ミヤマホオジロ



シマアオジロ



ノジコ



シベリアジュリン

「Today Birds Tomorrow Men」、「今日の鳥は、明日の人間」という言葉をご存知でしょうか？鳥達は多彩な種がその環境適応能力で、極寒の地から砂漠の乾燥地帯まで世界中のいたる所に棲息しています。生態系の上位に位置する鳥達の今を知ることは環境指標のバロメーターとしてとても大切なことです。

長崎市においても旅鳥を中心に300を超える種を観察できるということを、市民の皆さまもあまりご存じではないのではないのでしょうか。長崎市を訪れる鳥達を見守ることを通じて、私たちの未来に役立つことがあれば幸いに思います。

報告書内の画像につきましては出来るだけ種のわかりやすいものを掲載しましたが、撮影は素人同然の私自身の撮影によるものが殆どですので、お見苦しい点もあろうかと思えます。その点ご理解ください。

なお掲載写真の中で、

オオヨシゴイ、コヒバリについては、井上拓海氏より、

オオトウゾクカモメ、コウノトリ、アジサシ、レンカクについては木村智美氏よりご提供いただきました。

この場を借りて深くお礼申し上げます。